



近年、大学が所蔵する貴重資料が自宅のパソコンで画像として自由に閲覧できるようになりました。例えば、東京大学デジタルアーカイブポータルというサイトで「解体新書」と入力して検索します。前野良沢・杉田玄白らがドイツ語のオランダ語訳医学書「ターヘル・アナトミア」を日本語に翻訳した『解体新書』の画像や関連する文献が多数ヒットします。オランダ語の原本の方は「慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション」で閲覧することが

できます。これらの取り組みは大学の社会貢献という意味合いからも広く普及するようになりしました。『解体新書』は「国立国会図書館デジタルコレクション」でも閲覧できます。さて、今回は「九州産業大学図書館デジタルギャラリー」の引札のコレクションに注目しました。引札とは明治・大正期に盛んに用いられた商店のチラシですが、絵柄の面白さに特徴があります。通常は日常の生活の中で使い捨てられるものですが、保存状態の

良さや期待できません。九州産業大学図書館のコレクションは虫食いや折れ目、破れ、擦れ、汚れなどがなく、色鮮やかで非常に状態の良いものです。①「官許／御めくすり／井上洗薬・白明膏／筑前国粕屋郡上須恵村 斎藤久兵衛謹製」周囲の枠に「ただれめ・はやりめ・のぼせめ」など、多数の眼病の症状が平仮名で書かれています。上須恵村(今は村に同じ)は厳密には明治22年(1889年)以前の呼び方で、それ以降は須恵村大字上須恵となりませんが、厳密かどうかは確定できません。

②「官許／御めあらひ薬／本家調合所／筑前須恵 田原善五郎」商標は井の字を図案化した「井桁」の中に「上」と書かれています。上は上須恵を意味しているものと思われまます。③「登録商標／正明膏／須恵目薬／筑前糟屋郡上須恵 本家須原春陽堂」須恵目薬の「目」の部分に、眉と目の絵を当てているのが遊び心です。それによって一層目を惹こうという工夫をし

ているということにもなります。貝の図案についてはすでに本連載で紹介したことがありますが(「まちの史跡めぐり」第207回、「広報すえ」2023年5月)。商標としての登録は明治36年(1903年)でした。④「免許／青明膏／須恵目薬／筑前糟屋郡上須恵 本家須原氏謹製」貝の図案もあり、③とほぼ同じ内容ですが、正明膏が「青明膏」となっているところが違います。青明膏という目薬もあつたようです。①にあつた白明膏も正明膏に似た商品名です。⑤「登録商標／正明膏／須恵目薬／筑前粕屋郡上須恵 本家玄洋堂田原弥三製」商標は米俵を図案化しています。田原と俵をかけた、印象的な図案と言えます。⑥「登録商標／目薬 田原弥水／筑前上須恵有名眼医 田原養朴先生御真剤／筑前上須恵 正真本家 田原玄洋堂謹製」⑤と同じ玄洋堂ですが、正明膏は「膏」(練り薬であるのに対し、「水」は点眼薬を意味

しています。⑦「官許／万眼水／御目くすり／筑前粕屋郡須恵 吉松総兵衛」

「御目くすり」の「目」を眉と目の絵で表現しているのは③④と同じ発想ですが、どちらが先かは分かりません。こちらは大字須恵の製薬・売薬業者です。

⑧「官許／本家／御めくすり／正明膏／筑前上須恵 調合取次所」上須恵の下に「田原」という印影が見えます。②の調合所に対し、こちらは「調合取次所」ですが、その使い分けはよく分かりません。須恵町では江戸時代に須恵村の岡眼科(元は高場眼科)、上須恵村の田原眼科が名声を博したことから昭和戦前期にかけて須恵目薬の製薬、売薬業者が繁栄しました。その伝統の上に町外に出て薬局、薬剤師として活躍する人たちもあつました。「須恵町誌」は国会図書館デジタルコレクションでも読めるようになりました。その中に、明治36年(1903年)発行の「九州製薬案内」から須恵

町関係の製薬家の名を引いています(原本の誤字を正しました)。

て販路を拡大してゆきます。引札についても次の説明があります。

製品の宣伝チラシを引札といい、木版や銅版に文字や図柄を彫って印刷しました。表紙は目薬の引き札をカラージュしたものです。人目を引くデザインが工夫されており、「田原」をもじった「俵」印がトレードマークで、アルファベットで表記されています。最も大きいもので一六センチ四方で、大黒様が打ち出の小槌を振っています。手にした旗には、俵印の商標がないものは模造品である、と注意を呼び掛けている。天使や星をあしらった西洋風のデザインもあります。

⑨「山里の田舎なれども」表紙「筑前目薬「田原弥水」などの引札をカラージュしている。

(須恵村上須恵)須原松太郎・田原弥三・村山直次郎・売薬合名会社・内野常三郎・村山有奏・小山田清太郎・田原卯作・斎藤久兵衛・小山田直次郎・合屋弥四郎(須恵村須恵)吉松繁吉・吉松惣兵衛①斎藤久兵衛、⑤田原弥三、⑦吉松総兵衛(惣兵衛)の3人が一致しました。この内、田原弥三についてはご子孫に当たる樋脇由利子さんが「山里の田舎なれども」田原家文書に見る筑前上須恵の繁栄と暮らし(2024年)を刊行しておられますので、それを参照してみたいと思います。

製薬業は彌三(一八四七〜一九一八)の時代に更に躍進します。明治政府のもと、製薬は総務省(当時の名称は内務省……石瀧)が免許証を発行し許可制になりました。明治二十四年に「田原彌水」、翌年に「造化膏」の免許を取得します。「正明膏」「造化膏」「田原彌水」の三薬を主力商品とし

①井上洗薬白明膏御免くすり  
②御めあらひ薬  
③正明膏須恵目薬  
④青明膏須恵目薬  
⑤正明膏須恵目薬  
⑥目薬田原彌水  
⑦萬眼水御目くすり

⑧本家正明膏御めくすり  
⑨「山里の田舎なれども」表紙「筑前目薬「田原弥水」などの引札をカラージュしている。

⑩「田原弥水」を含む三種類の薬の引札(木版)

